

11 イチゴ(女峰)の空中採苗法における親株の肥培管理技術

福島県農業試験場 野菜部
平成12年度農業試験場試験成績概要
分類コード 03-07-13140235

部門名 野菜－イチゴ－施肥法－水管理・水分制御－採種・繁殖－施設資材

担当者 大越聡

I 新技術の解説

1 要 旨

イチゴの空中採苗法は、土壌病害回避や採苗作業の軽労化に有効であり、近年、市販の採苗システムを導入するばかりでなく、それら施設・装置を自作する生産者もあるほど、急速に普及している技術である。本研究では、これまで明確な基準が示されていなかった空中採苗法における肥培管理技術を確立するため、親株に与える肥料の量及び施用方法を明らかにした。

試験の結果、イチゴ(女峰)の空中採苗法における親株の肥培管理は、子苗の発生数が多く、肥料の濃度障害が認められなかった、以下の2方法が適当と判断された。

(1) EC 0.5 の養液を株あたり1日2回 400ml(200ml×2)施用する

(2) 肥効調節型肥料を株元に20g施用して1日2回 400ml(200ml×2)灌水する

これらの方法で得られた子苗数は親株あたり45株で、一般に土耕栽培で得られる子苗数と同等であった。また、この場合の窒素施用量は 株あたり 2.5g、1日あたり30mg/株 程度と推定された。

2 期待される効果

高設ベンチを利用した場合のイチゴ親株に対する施肥量の基準値として使用可。

3 適用範囲

市販のシステムでも、生産者が自作した設備でも適用可能。

4 普及上の留意点

(1) 本試験は「女峰」を用い、4月上旬定植、7月上～中旬仮植の場合の結果である。

使用した肥料と施肥方法は表1に示したとおりである。

(2) 本試験は、試作したベンチを用い、養液(あるいは水)が排出されない条件で行っているため、かけ流し方式のシステムでは、施肥量を増加する必要がある。

(3) 肥効調節型肥料の溶出型は70日であり、栽培条件が異なる場合は施用量や溶出型を調整する必要がある。

Ⅱ 具体的データ等

表 1. 施肥量

試験区名	施用肥料名	施用量	株あたり 窒素施用量 (g/株)	1日あたり 窒素施用量 (mg/株/日)
EC 0.50	OKF-1 0.50 g/l溶液	400 ml/株/日	2.4	30
LONG 20g	ﾎﾝｸﾞ424-M70	20 g/株	2.8	-

※ 灌水および養液供給期間は平成12年 4 月24日～7月13日(81日間)

※ 肥料成分：OKF-1 15-8-17、ﾎﾝｸﾞ424-M70 14-12-14

※ 使用培地：調整ピートモスとパーミキュライトを1：1で混合

表 2. 施肥量及び施用法の違いがイチゴ親株の子苗発生数に及ぼす影響

試験区名	累積 展開 葉数 (枚)	一次 ランナー 数 (本)	発生 子苗 数 (株)	展開葉数別子苗数		
				1～2葉 (株)	3～4葉 (株)	5葉以上 (株)
EC 0.50	23	11.0	47.2	21.4	21.8	4.0
LONG 20g	27	12.3	45.4	21.7	22.0	1.7

※ 供試品種 女峰、親株植付日 平成12年 4 月6日、調査日 平成12年 7 月13日

※ ランナー及び子苗の調査は「福島県野菜指導指針(技術編、平成 9 年 3 月)」に基づく

※ 累積展開葉数は親株の展開葉数で、調査日に展開している葉数と除去した葉数の合計

Ⅲ その他

- 1 執筆者:大越聡、高橋徹
- 2 主な参考文献・資料:なし